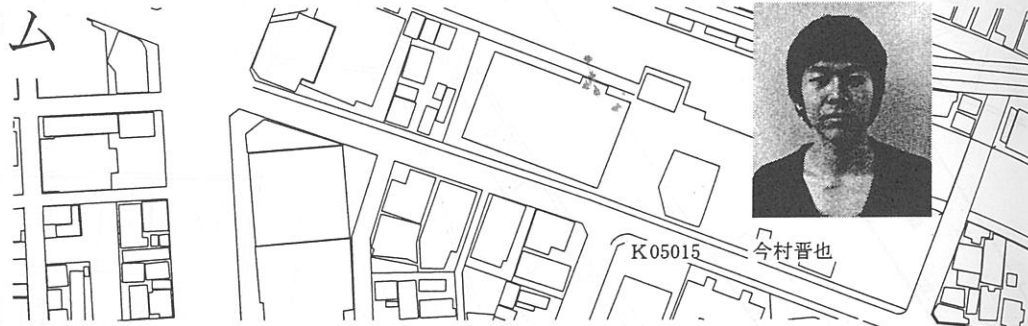
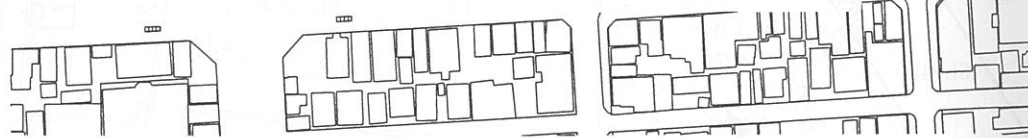


ホーム×ホーム



「都市と子ども」

また一つの街で都市開発が行われようとしている。
それは子どもたちの居場所が一つ失われることを意味するのだろうか？
今日に始まったことではないが、都市計画に子どもの視点、子どもの成長の場として都市を考える視点は弱くなっているといえる。
子どもの意思にかかわらず、子どもの数が日本で一番多いのは首都東京であることを忘れてはいけない。
そして、子どもたちは確実にそこに住んでいる。



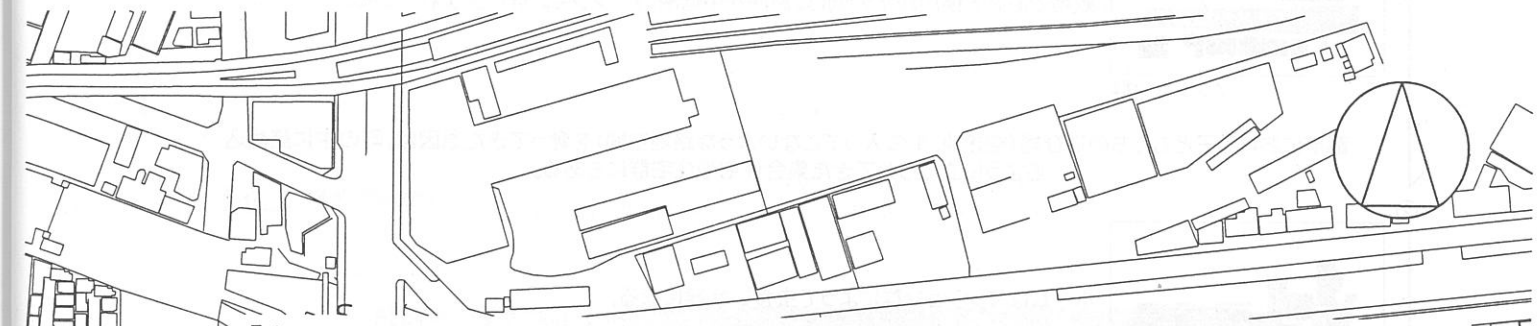
「concept」

都市の中で居場所を奪われてきた子どもたちを都市につなぎとめるためのホームをつくる。
それは同時に都市に対して、子どもという存在を意識させるシンボルとなり、子どもたちの心身の成長に寄与させる。



「敷地」

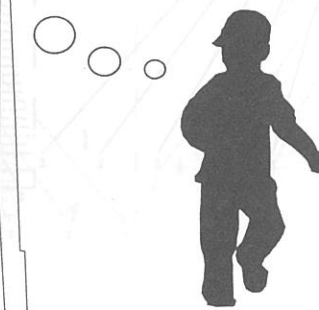
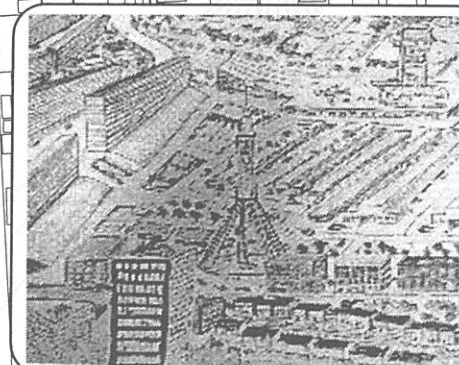
墨田区の中央部に位置する大横川親水公園のはじまり。
新東京タワーの開発地区に接する部分で、すぐ上を浅草通りが通る。
開発が進む一方で、人口増加による子どもの数の増加や地区によって保育施設が偏在しているため、保育施設や学童保育の要求が高まっている。
それに伴い、区は「待機児童の解消を目指す3ヵ年計画」を計画。ソフト面だけでなく、ハード面の対策も迫られている。
本計画敷地は、都市に対して子どもの存在を意識付けるといった条件の他、保育園の必要な地域を墨田区の各地区の就学前児童数、保育施設・幼稚園の分布、保育定員数より推測した結果によるところが大きい。



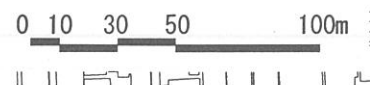
「ホーム」

子どもたちの家であり、ホームグラウンド。
現在都心部では、子どもたちが自由に遊ぶ空間は乏しくなっている。保育施設においては園庭をもっているところも少なくなっている。
しかし、子どもたちにとって外で自由に遊ぶことのできる空間は心身の成長の発達に非常に大きな影響を与える。子どもたちは遊ぶことが学ぶことにつながり、学ぶことが遊ぶことになる。
いろんなものが混ざり、いろんな景色が見える。そんな場所を子どもたちに与えたい。

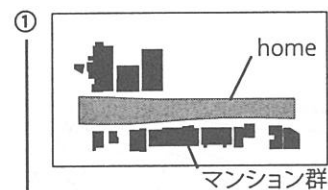
周囲を川に囲まれた墨田区にとって橋という存在は非常に重要な役割を果たしてきた。同時に橋は意匠的にも機能的にもシンボリックである。
かつて川として存在していた大横川親水公園に子どもの橋をかけることで、都市と子どもをつなぎとめ、子どもの存在を都市に意識させる。



30年以上前の子どもに未来予想された新東京タワー

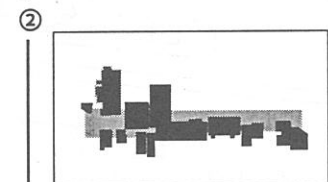


home diagram

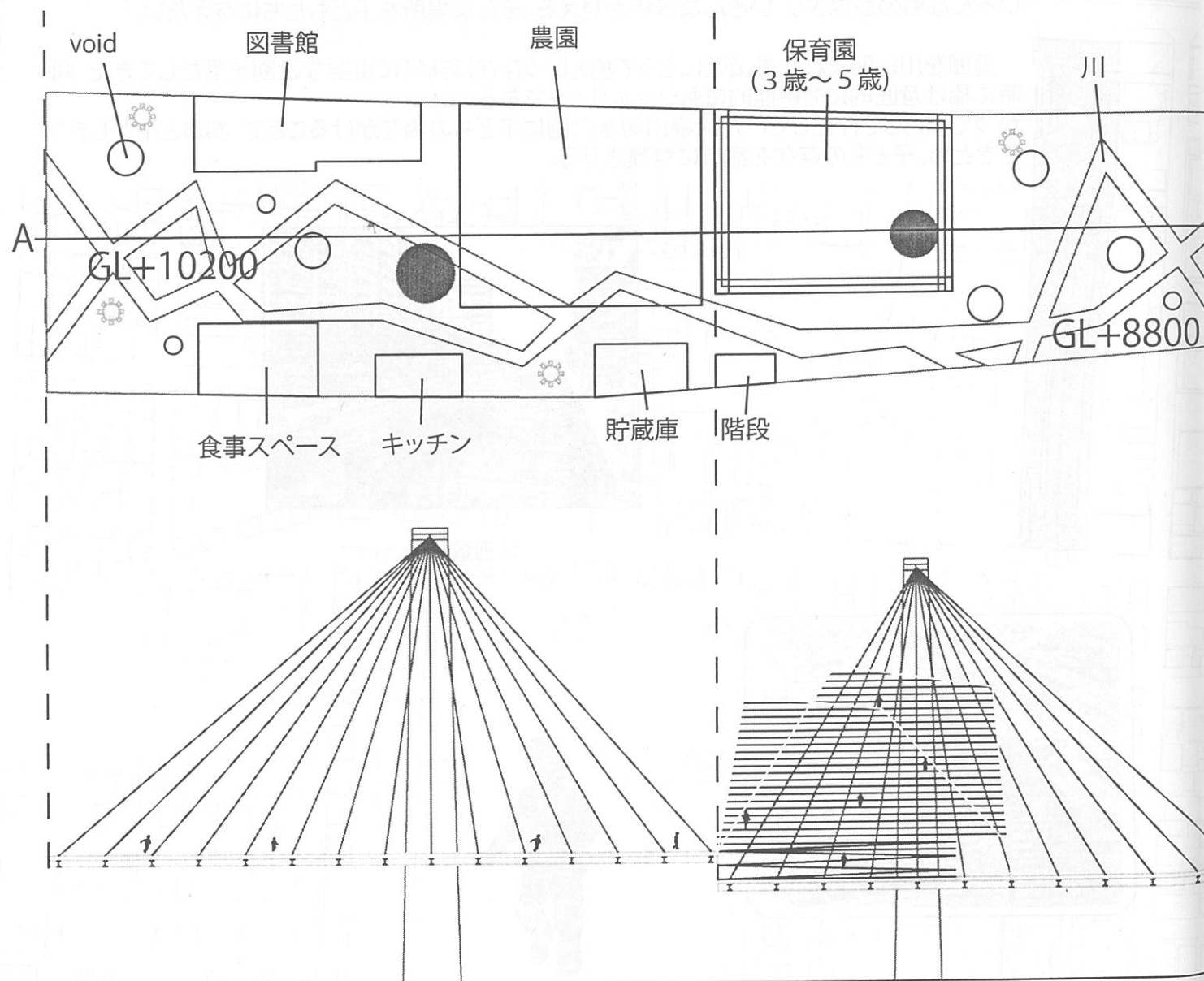


敷地である大横川親水公園は、周囲を中低層のマンション群に囲まれている。

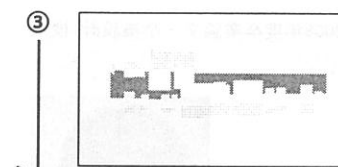
都市における子どもたちの遊び場(空き地、車の入ってこないような路地空間)を奪ってきた原因は、町の中に詰め込むように立てられてきた集合住宅や住宅群にもある。



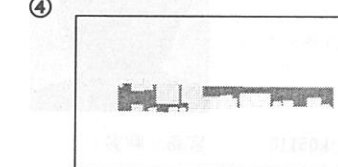
ホームはマンション群によって虫食い状態になる。



ホーム×ホーム
それは包まれたり、飛び出したり、くるくるまわったり
日常とは違うがそれは間違いなく子どもたちの家である。

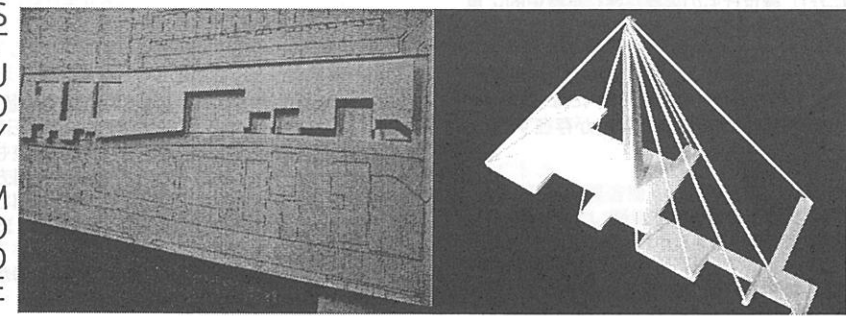


しかしそのような住宅やマンション群もそこに住む子どもたちにとっては、大事な生活空間である。

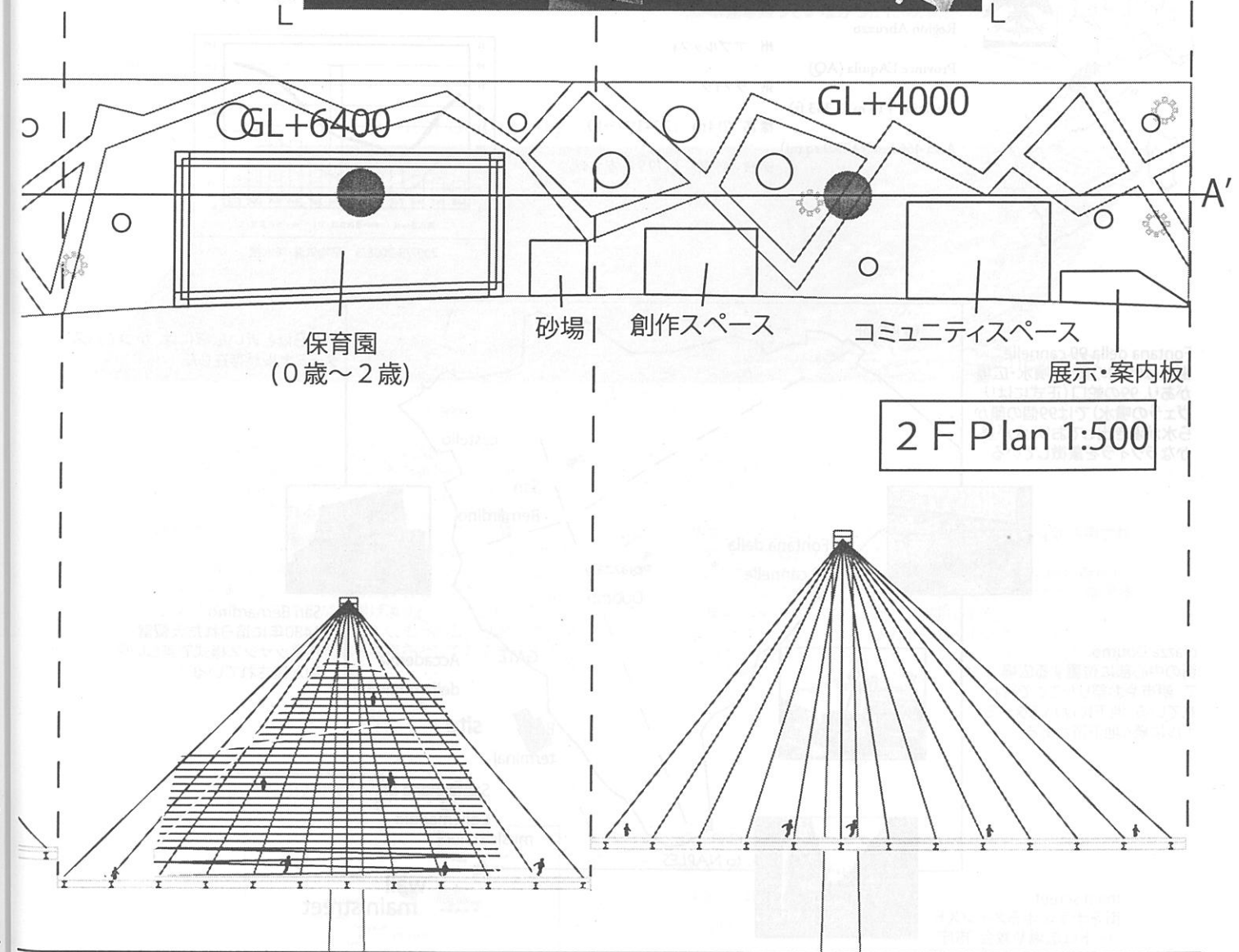


子どもたちのホームは、マンション群によって虫食い状態になる。
が、食われた空間は子どもたちの居場所へと変換される。

STUDY
MODEL



STUDY
MODEL



ホーム×ホーム
子どもたちはの家であるホーム×ホームはただの家ではない。
子どもたちは好奇心の塊となり、自分だけの高さ、眺めを追い続ける。
自分の街を家から眺めるかのように
僕たちの街はどう変わっていくのだろうか...

A-A' Section 1:500